

第四回報告書（最終報告書）
2024年6月5日-9月10日
（春学期終了～修士論文執筆終了）

国際ロータリー2710 地区
2023-24 年度 地区補助金奨学生
小林美晴

1. 報告書提出日

2024年11月22日

2. 基本情報

氏名：小林美晴

派遣ホストクラブ/カウンセラー：広島南ロータリークラブ / 山内恭輔様

教育機関：シェフィールド大学 The University of Sheffield

専攻分野：東アジアにおける政治とメディア MA Politics and Media in East Asia

3. 学業面での成果

まず春学期に提出したエッセイの結果についてです。二回目の課題だったため、秋学期ほど書くこと自体に苦労はしなかったものの、就職活動、修士論文との並行の中で課題をしなければならず、またその量も秋学期よりも増えたため大変でした。しかし、グループワークと個人のエッセイ課題において最高成績を取ることができました。エッセイの最高点を更新することができたのは修士論文を書く上でも大きな自信となりました。



←コースメイトたち。すべての課題が終わるとお疲れ様会をよくしてました。

また春学期のエッセイ提出後はすぐに修士論文の執筆を始めなければなりませんでした。私は日本の首相のリーダーシップについて、地域的な経済連携協定（RCEP）をテーマに研究を行いました。論文のタイトルは「The Prime Ministerial Power in Japanese Foreign Policy – A Case Study on The Regional Comprehensive Economic Partnership (RCEP)-（日本の対外政策における首相の権限—地域的な包括的経済連携協定（RCEP）を事例として—）」です。この研究では日本の首相やその側近が国内外にどのような影響力を持っていたのか、それらが政策決定にどのように影

響を及ぼしたのかといったことを政府の公式文書やメディアなどを用いながら国際関係学のフレームワークを用いて分析を行いました。日本外交政策において戦後初期は首相の権限は小さいとされてきたものの、首相の権限は現代に近づくほど強まっていることがわかっています。その代表例としては安倍晋三首相が挙げられます。特に経済外交に力を入れていた安倍政権下では環太平洋パートナーシップ協定（TPP）における首相の権限や影響力が多く研究されています。しかしながら同時期に交渉が始まった RCEP についての研究は限られていました。また従来では RCEP では首相の権限よりも省庁の役割が重視されていたため、私は首相の役割と影響力を明らかにすることを研究目的としました。論文では、国内政治と国際政治において二つの仮説を立て、それらの検証を行いました。結果として国内政治と国際政治の両方において首相によるトップダウン型での権限があったことがわかりました。まず国内政治における首相とその側近の権限は、党内における対立を最小限に抑えていたこと、安倍首相の影響で経済産業省に強い権限が持たされていたこと、RCEP を官邸の成長戦略の下に位置付けていたことの三つに分類されました。また国際政治においては国内政治における対立の少なさが交渉を容易にしたことを前提として二つの役割がありました。まず一つ目が中国との関係においてです。RCEP は中国と韓国を含んだ初めての経済連携協定であり、特に中国との関係は重視されました。親中派と呼ばれた側近たちによる安倍政権下の日中関係の改善が RCEP 締結においても無視できないことを論じました。また二つ目はアメリカとの関係においてです。中国との関係性を保ちながら、米国中心の貿易自由化を進めていたことを論じました。自分の興味のある分野を深めることができ、研究過程では様々な発見があったため、初めての英語論文執筆に苦しみつつも楽しみながら研究を行うことができたと考えています。コースメイトやフラットメイトと図書館やフラットで一緒に勉強をして研究過程を報告するなどして切磋琢磨しながら研究に励むことができました。

そして11月初めに学部から成績が発表され、この論文で Distinction を取ることができました。毎日毎日図書館に通い、孤独感や自分の能力の足りなさ、知識量の少なさに挫けそうになりながらも、自分ができるベストのものを提出するという執念で最後の最後までこだわって書きました。こうした頑張りが結果につながったことをとても嬉しく思います。また、執筆において指導教官だけでなく、学部の他の先生方も快く相談や質問に答えてくださり、こうした環境だったからこそ書き上げることができたのではないかと思います。本当に周りの環境に感謝しても仕切れません。また修士論文が合格したため、無事に卒業が決まりました。

学業面以外では、日本人の短期交換留学生たちとの交流がありました。8月に東京の大学からの短期の交換留学生たちが約60名ほどシェフィールドに滞在していました。たまたま Tesco（現地のスーパー）にいた際に、普段は聞くことがない日本語がたくさん聞こえてきたので「日本人ですか…?」と声をかけたところから数人の仲良くなりました。1ヶ月ほどの滞在と聞いたので、私が知り得る生活における情報やシェフィールドの美味しいレストランやカフェ、逆に行かない方がいい場所や食べないほうがいいものなどをできるだけ伝えました。そのうちの二人とはとても仲良くなったのですが、「イギリスでの短期の留学でもかなり人生が変わった」と言っていて、長く留学させていただいていることへのありがたさを改めて噛み締めました。来年か

らは東京で同じ社会人一年目として働く同期になるので、これからもこのご縁を大切にしようと思います。彼らの1ヶ月の留学はとても充実したそうで、とても喜んでもらえて嬉しかったです。また彼らと話す中で、留学という経験がいかにその人の人生の転機となるのかを感じさせられました。

また、フラットメイトたちとは時間が経てば経つほど本当に仲良くなり、ほとんど毎日一緒にご飯を食べたりするようになっていました。数ヶ月に一回は「フィッシュアンドチップス会」を開き、近所のフィッシュアンドチップス屋さんまで一緒に買いに行きテイクアウトして寮で一緒に食べるといったこともやっていました。また、7月にはイギリスで総選挙が行われ、14年ぶりの政権交代の瞬間に立ち会うことができたのもとてもいい経験でした。特に印象的だったのは、若い人も当たり前のよう



に選挙に行き、政治の話をフランクにしていたことでした。ただ話を聞いていると、政策によって彼ら自身の生活が強く影響を受けている身近な出来事が多くあり、そのため若者が政治に向き合わざるを得ない状況を作り上げているのかもしれないと感じました。また7月はサッカー（現地ではフットボールと呼ぶ）のヨーロッパ大会が開かれ、イングランドのチームが決勝まで行ったので現地人に混ざって友達と一緒にパブで観戦したのもとてもいい思い出です。決勝ではスペインが圧倒的に強く、結局負けてしまったのですが

....。帰国前には留学中に仲良くなったコースメイトやフラットメイト、その他の友達たち全員に感謝の気持ちを込めて手作りのカードとロータリーのバッチも一緒にプレゼントしました。折り鶴はとても有名ということや、デザインの美しさも相まって、みんな喜んでくれていました。



←インド人のフラットメイトが作ってくれたビリヤニ。野菜しか入っていないのにもとても美味しくて何回も作ってもらいました。

→フラットメイトとボードゲーム
キッチンで集まって気分転換をよくしていました。



4. 直面した課題

修士論文

実際は8月29日が修士論文の提出日だったのですが、8月は体調を崩す日が多く、泣く泣く1週間ほど締め切りを伸ばしました。学部のスタッフに相談すると、「一番頑張っているんだから絶対に取りなさい。却下されたら私が交渉してあげるからね!」と言ってくれました。留学が始まってから終わるまでずっと学部のスタッフの方の温かい支援の元、留学をすることができたことに改めて恵まれていたのだなと感じています。また、学部では決して書いたことのない分量の英文論文の執筆に大変苦勞しました。友人たちがどんどん前に進む中、自分だけが取り残されているような気持ちになり、焦りをずっと感じていたのを覚えています。また研究自体も一筋縄ではいかず、かなり苦勞しました。しかし、先生方の手厚いサポートやコースメイトたちとの議論、また時には学んでいる内容は全く違うフラットメイトたちと一緒に図書館に行って勉強するなど、研究の励みになる存在が多くいたため、最後まで走り切ることができました。

体調管理



留学の最後の方になると、簡単に体調を崩すようになっていました。おそらく不健康な食生活と、乱れた生活習慣が問題かなと思います。また私はもともと頭痛に苦しむ体質なのですが、8月に日本から持ってきた頭痛薬を全て使い切ってしまう、薬を飲めばどうにかなる頭痛で2、3日寝込んでしまいました（おそらく60粒は持ってきたはずなのですが…）。イギリスの市販の頭痛薬や解熱剤は日本のものよりもかなり効果が薄いため、重い頭痛を持つ私には全くといっていいほど効き目がありませんでした。薬は持っていきすぎるくらいが正解だなと感じました。

↑日本人短期留学生がくれた頭痛薬。これを飲んでやっと体調が良くなりました。

イギリス全土での暴動

留学をしてから特に明らかな人種差別に遭うこともなく、人も治安もいいな～とずっと思っていたのですが、8月にリバプール郊外で起こったイギリス人少女殺害事件がきっかけとなってイギリス全土で大規模な暴動が起きました。この殺人事件を起こした犯人はイギリス人らしいのですが、ルワンダにルーツを持つ両親を持つらしく、「移民がイギリス人を殺した」というフェイクニュースがきっかけで暴動まで発展したそうです。よく調べもしないで暴動まで起きてしまう状況に

どれほどの人が移民に対して良くない感情を持っているのかが目に見える形になりました。

「シェフィールドでも暴動が起きるかもしれない」「有色人種だと狙われるから外に出るな」と言われ、初めて自分が外からきた人間であることや差別される対象であることを感じた経験でした。実際にシェフィールドの近くの街ではホテルが燃やされ、連日の報道がとても怖かったです。イギリス社会の不安定さ、反移民感情などがあからさまになった出来事だと感じました。

やってこない夏と明るすぎる夜

イギリスの夏は過ごしやすいと聞いていたので、夏が来るのを今か今かと待っていました。しかし去年は6月ごろが暑かったらしいのですが、今年は一向に熱くならず…最高気温が26度の日が1日あったかと思えば、すぐ20度まで下がってしまい、半袖を着る機会がほとんどありませんでした。現地の友達に「いつ夏がやってくるの?」と聞くと「1週間もあればいい方だよ」と言われて絶望したのを覚えています。また夏は日が暮れるのがとても遅く、23時ごろになってもまだ空が明るかったです。そして日が昇るのは朝の4時ごろ。ずっと明るい日が続くので体が疲れやすくなってしまったのか、思ったより寝てしまうことが多くなってしまい、生活リズムが崩れました…。



↑23時ごろ。まだ太陽があります..

出国時の預け荷物のハプニング

入国時も留学最大のハプニングを引き起こした私ですが、なんと帰る飛行機に乗る前にも留学最大の一つと呼ぶことができるハプニングを起こしてしまいました…。予約時に預け荷物は25キロと決まっていたのですが、測る場所もないので空港にスーツケースを持っていった際に初めて測りました。するとなんと重さが37キロ! 12キロもオーバーしていたのです…。そして空港で1時間以上かけてお土産や私物などあらゆるものを捨てました(涙)そしてやっと25キロにすることができ、受付に持っていくと、「はい、35キロまでいいですよ」と言われて仰天。ショックで言葉を失いました…。しかも二つ目のバックは重さを測られず…。ミニマリスト(物を最低限しか持たないこと)になるべきだなと改めて思いました。

5. 今後の課題、キャリア目標

2025年4月からはかねてから第一志望としていた独立行政法人の職員として勤務する予定です。農林水産、伝統工芸品の輸出促進、貿易、中小企業の海外展開、イノベーション促進といった業務は、どの分野でも日本のこれからの産業を支えること、日本の経済発展につながるもので、私自身が関わりたい領域になっています。幼少期に抱いていた「世界が平和になって欲しい」という漠然な思いから「まずは自分の国である日本をよくしたい」という思いに変化しながらも勉学に励んできました。こうした思いが独立行政法人での勤務という具体的な形となって実現できたことを本当に嬉しく思っています。まさか自分が選んでいただけるとは夢にも思わなかったのですが、人事の方から「小林さんにはぜひ入ってほしいと思っていたので嬉しい」と言っていたら、自分自身が希望する場所かつ、求められている組織にご縁をいただくことができ、とても嬉しかったです。部署としてはイノベーション部の配属を希望しています。具体的には大学の研究室からのスタートアップの育成、また地方から世界を目指すスタートアップの育成と環境整備、産学官連携の促進に携わりたいと思っています。その理由としては、日本政府がこれから特に力を入れていこうとしている分野であることや日本の技術力を世界に発信していくために取り組むべき分野だと考えているからです。昨今は、他国と比べると日本は技術革新の面で劣っていると言われがちですが、実は支援の機会に恵まれていないことや環境が整っていないといったことが原因である可能性があり、決して他国より技術力がないとは言いきれないからです。イノベーション部にて世界と日本を繋ぎながら、日本発の社会を変える技術発信と日本の経済発展に貢献していきたいです。4月から2~3年は東京本部での勤務になりますが、その後は地方事務所か海外事務所への配属となります。10年間のうち、必ず、地方と海外事務所の両方の配属があります。これからも語学力はもちろん、修士課程で培った政治経済の専門性、コースワークや研究から得た分析力といったアカデミックスキル、コミュニケーション力や外交性といったソフトスキルなどを存分に活かす機会に恵まれることが予想されます。留学をしていた時が人生の最高地点とならないように、日々、最高記録を更新していけるよう精進してまいります。

また今回修士課程に進んだことで、研究への関心が大いに高まりました。学部で一番お世話になっていた方が日本人女性の先生という新たなロールモデルに出会ったことや他の先生方からも博士課程への進学を勧められたこともあり、将来的に研究の道を志すという選択肢も出てきました。まだまだ能力的にも知識量的にも博士課程の進学を現実的には考えられていませんが、実務の先の一つの選択肢として検討したいなと思っています。

6. 今後のロータリー活動への参加

留学中のロータリー活動への参加やロータリアンの方々との交流が叶わなかった分、帰国後はもっとロータリー活動への参加をさせていただきたいと考えています。帰国後は推薦ロータリーである広島南ロータリーの皆様の例会に参加させていただき、留学報告もさせていただきました。留学中の感情を表したグラフを紹介したのですが、皆さんから「面白かった」と言っていただき、光栄でした。またその後は10月末に岩国で開かれた地区大会にも参加させていただき、お話しする機会をいただきました。同時に他の留学生の方のお話を聞くことができたり、ロータリーの活動に関する思いをいろんな方から聞くことができました。そしてあらためてロータリーの活動の尊さを感じる機会になりました。また、地区大会の懇親会で推薦



ロータリーである広島南ロータリーの皆さんのテーブルに行った時に「さっきのプレゼン良かったよ」「もっと小林さんの話聞きたかったな」「みんなで写真を撮ろう」とそれぞれに声をかけてくださいました。懇親会だけでなく、帰りのバスでも皆さんと楽しくお話をさせていただき、とても素敵な思い出になりました。私は経済的な補助がなければ留学は諦めなければならない立場でした。そんな私にとってロータリー財団の支援がなければこの一年間の留学は

実現し得ませんでした。ロータリー奨学生としてこれからも機会があればぜひ様々な大会やイベントに参加し、このご恩を少しでも返していけるようになりたいと考えています。また、地区大会を通して初めて奨学生の先輩である西山さんにお会いしました。同じ地区補助金奨学生だった中村さん以外で直接奨学生の方にお会いしたのは初めてだったので、とても貴重な機会になったと思っています。奨学生の方々はそれぞれがいろんな形で国際的に活躍されている方ばかりなので、こうした先輩方のような存在になれるようこれからも頑張りたいと思いました。これからもロータリアンの方々だけでなく、奨学生の方々とも積極的に交流をしていきたいです。



←懇親会のビュッフェ。「やっぱり日本食って美味しいですね(涙)」と言っていたら笑われました。

7. 今後の奨学生への助言

奨学生への助言というよりかは、私なりに奨学生の皆さんへのエールを書きたいと思います。私は留学前、楽しみよりも不安がとても大きかったです。でも、苦しい時も楽しい時もどんな時も自分の経験と知識の獲得に貪欲でいようと考えていました。留学という機会は人生で何度も来るものではないと思うので、どんなことにも貪欲にいることは大事なのかなと思います。ただ、その一方で貪欲すぎるのは禁物だなということも改めて感じました。私は初めての留学だったこともあり、外国で暮らすこと自体、初めての連続でした。そんな環境下でさらに研究をするとなるとさらに大変かと思います。気を張らず、頑張りすぎず、自分が後悔しないベストを尽くすこと。そして時々息抜きをすること。でもやるべきことはしっかりやること。こうしたバランスをとることが何よりも大事なのだと身にしみて感じました。無理せず、自分らしく、与えられた留学を楽しんでください。

8. その他、特記事項

留学報告が大変遅くなり、申し訳ありません。留学開始前からロータリーの方には色々な面で支えていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ロータリーの方が長年続けてこられた活動の尊さを時間が経てば経つほど強く感じています。これからもロータリー財団の奨学生として大いに社会貢献に励んでいきたいと思っています。

また同時期に奨学生として留学した中村さんにも色々な面で大変お世話になりました。イギリス留学は2度目であることや社会人を経験されている中村さんのようなお姉さんの存在に出会うことができたのもロータリー財団からいただいたご縁だと感じております。本当にありがとうございました。

